

第1次

第1・2時

本時の
目標

「ぼく」の推理を予想し交流することを通して、場面と場面とのつながりを読むとよいことに気づき、作品のおもしろさを探るというめあてを意識して学習の見通しをもつことができる。

主な学習活動	主な発問・留意点	児童の反応・板書例
1 題名と扉の言葉を読み、作品に興味をもつ。 2 第七場面の終わり（P75L7）まで範読を聞き、「ぼく」の推理を予想する。	仲の悪い東君と西君は、いったいどんな出来事を起こすのでしょうか。そして、その出来事の秘密を、皆さんは見破ることができるでしょうか。 題名に「友情の」と付いているのは、どういうことなのでしょう。 第八場面の最初に「ここからは、ぼくのすいりだ。」とあります。「ぼく」は、どんな推理をしたのでしょうか。この先を読む前に、予想してみましょう。 ○先を予想させることで興味を喚起する。また、人物像や出来事をつなげて読もうとする読みの構成を作る。	【C】二人で壁新聞を書いているうちにけんかになって、壁に油性ペンで書いてしまったのだと思います。 【C】青い油性ペンだから、東君が書いているところに、西君が邪魔をしたと予想できます。 【C】見つかると困ると思って、「二人は油性ペンをさわろうとしなかった」んじゃないかな。73ページ5行目に書かれています。 【C】「そこには、何か理由があるように思えてしかたなかった。」とあるから、「ぼく」は怪しんでいたのだと思います。 ●語り手が「ぼく」であることを確かめる。

主な学習活動	主な発問・留意点	児童の反応・板書例
3 最後まで範読を聞き、感想をもつ。 4 「ぼく」が推理した手がかりに気づき、この物語のおもしろさを探るというめあてをもつ。 5 単元終末の言語活動を理解する。	最後まで聞いて、どんな感想をもちましたか。 「ぼく」の推理で、私たちが気づかなかったところがありましたか。 「ぼく」が推理した手がかりを見つけるために、まずは、登場人物の人物像や出来事を確かめていきましょう。 謎解きの話をミステリーといいます。ミステリーを読み、ポスターにして、友達と紹介しましょう。	● 推理していくところがおもしろい。 ● 謎解きみたい。 ● 二人は、いつから仲よくなったのかな。 ● 「ぼくのすいり」は、どこまでが本当なのかな。 ● 個の疑問も大切にし、問いをもちながら読み進めるようにする。 ● 放課後に水筒を取りに戻った場面にも、ヒントがあった。 ● 他にもまだある。もっと詳しく読んでいこう。 ● ポスター（書名、作者名、登場人物、起こる事件などを書いたもの）のモデルを示し、読書意欲を喚起する。 ※第三次の指導展開を参照のこと。

第2次

第3時

本時の
目標

登場人物の人物像や役割を捉え、それらが話の展開の中でどのようなつながりがっているかを見つけていくことができる。

主な学習活動

1 本時のめあてを確認する。

2 登場人物の人物像を捉える。

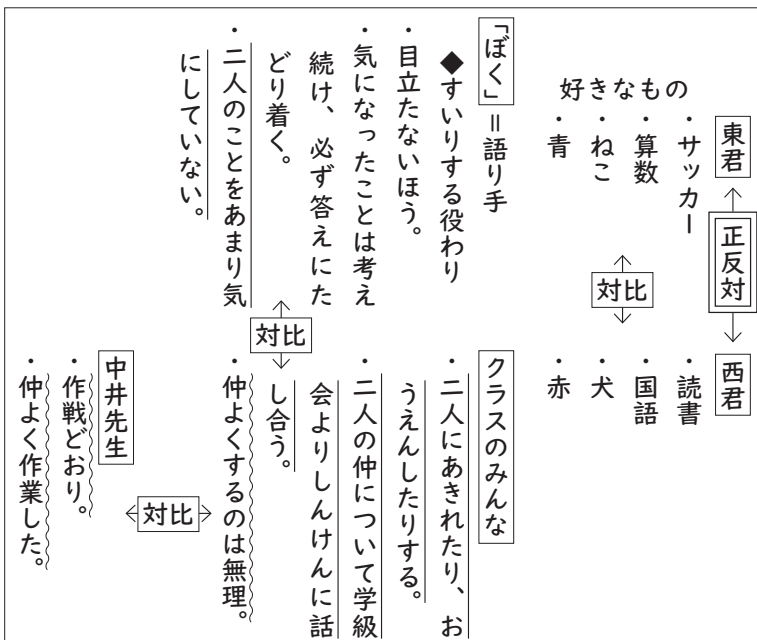
主な発問・留意点

「ぼく」が推理した手がかりを見つけるために、登場人物の人物像と出来事を確かめるのでしたね。

まず、登場人物の人物像から確かめましょう。

○東君と西君だけに注目しがちである。「ぼく」が語り手であり、中心人物であることに気づかせるためにも、「ぼく」の人物像は、「クラスのみんな」とは対比的であることを押さえる。

児童の反応・板書例



◎東君と西君は正反対だ。対比的といえる。

主な学習活動	主な発問・留意点	児童の反応・板書例
3 話の展開の中で、東君と西君の人物像とつながるところを考える。	この話の中で、東君と西君の人物像とつながるところを見つけてみよう。	㊦新聞の記事の内容が、それぞれが好きなものだ。 ㊦それぞれが好きなサッカーや読書を、いっしょにするようになっていく。

第2次

第4時

本時の
目標

出来事と、登場人物の行動や様子を時系列に読み取り、「ぼくのすいり」とのつながりを見つけることができる。

主な学習活動	主な発問・留意点	児童の反応・板書例
1 本時のめあてを確認する。 2 出来事と、そのときの人物の様子を読み取る。 3 曜日ごとに、誰が、何をしたのか、読み取ったことを交流する。 4 第八場面の「ぼくのすいり」とつながるところを見つける。	今日は、出来事を確認したのでしたね。 何曜日に、誰が、何をしたのでしょうか。 曜日と、誰が、何をしたのかが分かったところに、サイドラインを引きましょう。 ○曜日は赤の四角で囲む、したことは鉛筆でサイドラインを引くなど、指示を出す。 ○学習者用デジタル教科書+教材の「マイ黒板」を活用し、本文を抜き出してまとめさせるのもよい。 これらの出来事や人物の行動・様子と「ぼく」が推理したことがつながっているのは、どこでしょう。 ○「ぼく」の気づきが、読者に「なぜだろう。」と思わせることを押さえる（「ぼく」が語り手である効果）。	※月～金曜日の整理の例。□数字は場面。 月曜日 ② 二人が花びんをわった。協力しかべ新聞を作るように先生に言われ、作りあげた。 火曜日 ③・④ 先生の言葉に、二人は顔を見合わせてうつむいた。休み時間にいっしょに本を読んだ。サッカーをした。プリンは、取りにも行かない。 水曜日 ④ 西君が先生の方を見る。↓東君がそでを引っばる。 東君が職員室の方へ行こうとする。 ↓西君がついていく。 木曜日 ④ 東君が西君に声をかけ、シュートをほめる。 金曜日 ④・⑤ 西君が東君に声をかけ、本をかす。 顔をよせて話し合う。（↓あやまりに行くと決めた）油性ペンをさわろうともしない。 ◎放課後、「ぼく」は分かってしまった。 二人でいるのが 楽しくなってきた よづれをかくす おたがいから目がはなせない しよくよくがない

第2次

第5時

本時の
目標

東君と西君の関係を中心に、この物語に描かれている変容を読み取り、題名の意味を考えることができる。

主な学習活動

1 物語の最初と最後で
変化したことを読み
取る。

主な発問・留意点

前の時間には、「ぼく」の推理と出来事に、多くの
つながりがあったことが分かりました。では、この
物語の最初と最後で変化したことについて考えま
しょう。何が、どのように変化したのでしょうか。

○東君と西君の関係、二人に対する「ぼく」の見方、
二人に対するクラスのみんなの見方、壁新聞など、
観点が最後に明確になるように、書き分けなが
ら板書する。

○途中で、「二人の関係」「壁新聞」のように観点を
考えさせて、小見出しを付ける。

○東君と西君はいつから変わったのか、それぞれの
考えをもたせる。

2 題名の意味を考え
る。

壁新聞も変化しましたね。

この物語では、壁新聞が重要な役割を果たしていま
した。それでは、なぜ、題名が「かべ新聞事件」「青
いインクの秘密」などではなく、「友情のかべ新聞」
なのでしょう。

児童の反応・板書例

東君と西君の関係

とても仲が悪い ↓ 二人でいるのが楽しくなった

相手のせいにする ↓ かばい合おうとする

たいこう心をもやす ↓ ゆずり合う・協力する

二人に対するクラスのみんなの見方

仲よくするのは無理 ↓ なんだかうれしい

「ぼく」の見方

気にしていない ↓ 気にかけて、すいりまでした

かべ新聞

それぞれで作成 ↓ 二人で協力して直す

上の方が青くふち取り ↓ 青と赤の二重のふち取り

いさかいのかべ新聞 ↓ 友情のあかしのかべ新聞

○壁新聞の事件が、二人が仲よくなるきっかけとなっ
たから。

○「青と赤の二重のふち取り」というところに、友情
が生まれたことが表れています。

○だから、題名に「友情の」と付いている。読者に推
理させるおもしろさだけじゃないものがある。

第2次

第6時

本時の
目標

この物語のおもしろさについて、理由や具体を明らかにして書きまとめ、交流を通して新たなおもしろさに気づくことができる。

主な学習活動	主な発問・留意点	児童の反応・板書例
1 この物語のおもしろさについて、理由を明らかにしながらまとめ。 2 まとめた内容を全体で共有する。 3 次時に行うことを理解する。	この物語のどんなところがおもしろいと思いましたか。理由や具体例とともに、ノートに書きましよう。 ○書き方の枠組みを示す。 ○前時までの学習を振り返らせ、多様なおもしろさに気づかせるように促す。 ・つながりを見つけながら読むおもしろさ ・「ぼく」といっしょに読者が疑問をもって読み進めるおもしろさ ・題名に結末が示されているおもしろさ ・変容したのは人物だけではないおもしろさ など ○書き終えた子どもどうしで、ノートを交換して読み合うなど交流を始め、全員が書き終えたところで、全体場で発表させる。 次の時間には、いよいよ自分が紹介したいミステリー作品のポスターを作ります。	わたし（ぼく）がおもしろいと思ったところは、 なぜなら、 または、 例えば、 【板書例】 【C】僕がおもしろいと思ったのは、意外なものまでつながっていたことです。例えば、「ぼく」が忘れた水筒を取りに行くところで書かれている見回りの先生などは、一見関係なさそうなのに、「ぼくのすいり」とつながっていました。他にも、――。 【C】私が書いたのとは違うおもしろさだけれど、確かにこの物語の特徴だと思いました。

第3次

第7・8時

本時の
目標

ミステリー作品を紹介するポスターを作って読み合い、次に読みたい作品を見つけることができる。

主な学習活動	主な発問・留意点	児童の反応・板書例
1 本時の活動の見通しをもち、ミステリー・ポスターに書く内容を確かめる。 2 読んできたミステリー作品の中から、紹介したいものを選び、ポスターを作成する。 3 ポスターを互いに読み合い、次に読みたい作品を見つける。	これまでに読んだミステリー作品の中から、紹介したいものを選んで、ポスターを作りましょう。 ポスターには、どのようなことを書いたらよいでしょう。 ○書く内容を確かめる。 ・書名、作者名、登場人物とその人物像 ・事件の発端（時や場所などの設定を含む） ・お薦めのポイント（内容のお薦め、どのようなタイプの読者にお薦め など） ・誘う言葉 ○必ず書く必要のある事柄と、選択するとよい事柄、時間的に余裕があったら書くことよい事柄などを整理する。 ポスターが仕上がった人から、交換して読み合いましょう。 ワークシート（ノート）に、交換した人の名前、書名、作者名、読みたい度数（星や数字で表す）、ポスターのよいところをメモしましょう。	児童の反応・板書例 ○書名（作品名）と作者名。 ○登場人物。どんな人かも紹介するといい。 ○いつ、どこで、どんな出来事が起きた、ということを紹介しないと。 ○でも、誰が、どのように謎を解いたのかを言ってしまうと、読みたいなくなってしまう。 ○「これから、どうなるのでしょうか。」で終わると、その先や結末が気になって読みたいなくなる。 ○だから、事件の解決については書かない。 ○お薦めのポイントを書いてもいいと思う。 ○どんなタイプのミステリーが好きとか、学校物が好きとか、野球が好きとか、「こんな人にお薦めです。」というのを書くのもいいと思います。 ○空いたところに挿絵を描いてもいいね。 ●ポスターの代わりに、ICT端末のプレゼンテーションソフトを利用することも可能である。その場合、一シート目に題名と作者名、二シート目に登場人物について、三シート目に事件など、シートごとに何を書くかを決めると作りやすい。

■ 単元構成の考え方とポイント

本作品は、読者が、語り手の「ぼく」といっしょに疑問をもち、推理しながら読み進めていく。また、「ぼくのすいり」を読み、再度作品を読み直すことで、初読では気づかなかった伏線に気づく。このような作品の特徴をいかし、謎解きのおもしろさに加え、仲間と交流することを通して多様なおもしろさに気づかせるように、本単元を構想した。

第一次では、三つのことをねらう。一つ目は、子どもが自然と問いをもつようにすること。二つ目は、その問いを解決するためにどのように読んでいくか、これまでに身につけてきた読み方を活用するように、学習者自身に学習の見通しをもたせること。三つ目は、単元終末に言語活動を設定し、ゴールイメージをもたせること。

第二次では、問いを解決するために、登場人物の人物像や出来事と、「ぼくのすいり」とのつながりを見つける。さらに、本作品に描かれている変容を読み取ることを通して、「かべ新聞」の役割から題名のもつ意味に迫らせるようにした。最後に本作品のおもしろさとその理由を書きまとめて交流することで、読者によって多様なおもしろさがあることに気づかせたい。

第三次では、ミステリー作品の紹介ポスターを作成させる。紹介ポスターに何を書くべきかを検討することが、ミステリーの読み方を振り返ることとなる。また、互いに紹介し合った作品が次の読書へとつながることをねらう。

■ 授業を進めるうえでのポイント

第一次の最初の読み聞かせでは、第七場面までいったん止め、「『ぼく』は、どんな推理をしただろう。」と、学習者が自然と問いをもつことができるようにした。その後、最後まで読み聞かせることで、「ぼく」が推理した手がかりを探すには、登場人物の人物像や出来事の叙述に即してつながりを見つけるとよいことに気づく。このように、問いを第二次の学習へとつなぐ。

また、第一次に教師がミステリー作品の紹介を行う。これは、単元終末の言語活動のモデルを示すと同時に、活動や並行読書の意欲を喚起することをねらうものである。これは、第三次に紹介内容を確かめる際にも活用できる。

第二次の学習で気をつけたことは、具体的な叙述を挙げながら場面と場面とのつながりを見つけた際に、「同じような事柄が出てくるときは、描かれ方を比べる」「対比的な事柄や描かれ方は、注意して読む」のように、他の物語を読む際に活用できる言葉にして押さえることである。

■ 言語活動の工夫

単元終末のポスター作りは、ICT端末のプレゼンテーションソフトを活用すると、表紙の写真を取り込んだり、登場人物や事件についてシートごとに説明したりするなど、作成しやすい。また、本単元ではポスター作りを終末の言語活動としたが、ねらいは日常の読書へとつなぐことにあるため、ミステリー作品を読むだけに留めてもよい。ただし、書名とおもしろさを記録させるなど、評価できるように配慮する。